

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

—実践的な評価手法を中心に—

横浜国立大学大学院 環境情報学府 博士課程後期

福井 弘教

1. ルーブリックの利活用動向

教員が、授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称、FD (Faculty Development) が学部では2008年度より実施を義務付けられた。一方、質的評価指標であるルーブリックが用いられる契機となったのも中央教育審議会（以下、中教審）（2008）による学士力の提示とされている（星・越川2020）。大学卒業段階における学生の学習達成状況についての評価の明確化を求められ、その後の中教審で、ルーブリック研究・開発の重要性（2012）、授業の質保証におけるシラバスとルーブリックによる運営（2014）（文部科学省・大学教育部会資料2014）、ルーブリック活用による学習達成状況の可視化（2018）が指摘されるなどFDと共にルーブリックへの期待は高まりをみせている一方で、大学教育におけるルーブリックの利活用率は必ずしも高くはない。

文部科学省が2018年度に行った調査によれば、学修成果の把握・可視化のための各種取組として、学部段階において、学生の学修成果の把握を行っている大学数は年々上昇傾向（2018年：401大学【54%】）にあり、その把握方法としても外部の標準化されたテスト等による学修成果を調査・測定をするアセスメントテストを活用する大学は75.8%（学生の学修成果の把握を行っている大学の内数）と進む一方、教学マネジメント指針（2020年1月中教審大学分科会）において、成績評価及び学修成果の把握をするに当たって、有効な取組とされているルーブリックの活用は約17%にとどまっている（文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（2018年度）」）。

ルーブリックを用いた質的評価は、各指標で学生自身が「何を求められているのか」を把握することができることに加えて、教員が「どこまでできているか」を学生に提示できる点に大きな意義があるが（福田ほか2018）、なぜ、利活用率が伸長しないのだろうか。長い歴史のあ

る定量的評価（通常のテスト）と比較すると、ルーブリックの実践にあたっては、教員がルーブリックの知識を獲得することから始まり、開発にあたっては多くの時間や作業、工程を要することが利活用率伸長の阻害要因であると推察されるが、実際に利活用されているルーブリック開発や実践の実態が筆者の関心事である。

2. 研究方法

(1) 目的

ルーブリックのレビューを行った国内文献については管見の限りにおいてほとんどみられない。本研究は、国内の大学（学部）におけるルーブリックに関する文献動向を把握して、ルーブリック開発や実践の実態に関する知見を整理することを目的とする。

文献動向の把握にあたり、1) CiNii, 2) Google Scholar, 3) J-Stage の3つのデータベースを利用してシステムティックレビュー（以下、文献レビュー）を行った。3つのデータベースを利用することにより、検索漏れや表記の誤りを確認する狙いがある。

(2) 概要

最初に時期を特定せずに、「大学」、「ルーブリック」のキーワードにより検索を行った。1990年代から報告がみられ、1167件と膨大な検索結果となった。時期を2000年以降に特定しても1163件であったことから、大学におけるルーブリックが新しい概念であることが示された。さらに前述した2008年以降の検索を行ったが、1098件と大きな減少はみられなかった。したがって、ルーブリック研究の大半が2008年以降であり、研究についても近年に集中しているであることが明らかとなった。この結果から大学におけるルーブリック研究動向の把握を試みる（検索日：2022/6/26）。

新しい概念である「ルーブリック」であるが、それを机上で議論するだけでは、ルーブリックを評価すること
教育デザイン研究第14巻（2023年1月） 20

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

はできない。すなわち、教員を中心にルーブリックを実際に開発して、それを教育現場において実践することによって、ルーブリックの評価が可能となってくる。

したがって、次に、「開発」、「教育」、「教員」、「実践」、「評価」のキーワードを追加して検索を行った結果、15件が該当した。このうち、国内大学以外の報告を除外したところ、9件の報告が該当した。この9件についての文献レビューを行っていく。

さらに、レビューの検索結果における近年（2019年：理系対象論文、2020年：文系対象論文）の報告についてのテキストマイニングを行うことによって、ルーブリック開発についての実態を捕捉していく。

テキストマイニングについては、ユーザーローカルのテキストマイニングツールを用いて、以下の分析を行う。説明と結果図はユーザーローカルHPに依拠している (<https://textmining.userlocal.jp/>)。

1) 「単語出現頻度」 (本研究では名詞に限定する)

文章中出现する単語の頻出度を表している。単語ごとに表示されている「スコア」の大きさは、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表している。通常はその単語の出現回数が多いほどスコアが高くなるが、どの文書にもよく現れる単語についてはスコアが低めになる。出現回数だけでなく、重要度を加味した値が「スコア」で、スコアが高い単語は、そのテキストを特徴づける単語である。

2) 「共起キーワード」

文章中出现するワードの出現パターンが似ている単語を線で結び、出現数が多いワードほど大きく表示され、また共起の程度が強いほど、太い線で描画される。なお、テキストマイニングは本文と注に対して行い、参考文献は除外する。

3. 結果

(1) 文献レビューの結果

笠原ほか(2008)では、社会福祉関連科目の教授法の改善として、1年次必修科目の2科目で、課題や試験の評価方法を明記した「ルーブリック」と、毎回の課題として講義ポイントを学生が記入する「ワークシート」を導入した授業デザインを実施している。学生に対して期待される行動は「学習習慣の定着」であった。2ヶ月間試行後の中間評価として、出席率、ワークシート提出率、

ワークシート評価を分析したところ、(1) 学生の授業への取り組みが真剣になりノートの取り方が向上し、(2) 学習態度の思わしくなかった学生も、小テストの結果やルーブリックの厳密性を認識するにつれて真剣な学習者に変化した、(3) 初年次で教員の要求水準を明確に示すことの重要性を明らかにしたという研究である。

松尾・中沢(2014)では、一般的なルーブリック開発においては理論的枠組みに基づき、科目の教育目標となる汎用的技能を客観的に観察可能な行為に落とし込む方法や、それによって構築された既存のルーブリックをカスタマイズする方法を用いることが多いとされる。京都産業大学のPBL科目では実務経験者を多く取り入れた教員団の形成により、教育目標となる汎用的技能について独自の概念形成が行われてきた。このため既存の理論的枠組みを直接当てはめてルーブリックを開発した場合、これまで教員団が創り上げてきた独自の教育概念を十分に活かすことは難しい。本研究では、授業実践者からヒアリングデータを取得しデータを質的に分析することを通じて、PBL科目のルーブリックの開発を行うという試みを行った。授業実践者と分析者が関与したルーブリックを利用することで、既存のルーブリック利用と比較すると教員の違和感の軽減が図れることが見込まれた。

小野ほか(2014)では、新潟大学歯学部初年次教育において学習成果の直接評価に向けて、パフォーマンス評価を導入すべく、レポートから能力を読み解くルーブリックづくりに取り組んだ。また、この経験からみえてきたパフォーマンス評価の難点とその対処について検討した。その結果、パフォーマンス評価により能力を把握できる可能性が示されたが、導入には教員の理解と協力、能力と関連した適切な評価観点の設定、評価の信頼性を高める工夫、評価と指導の一体化を考慮した授業デザインなど、複数の課題があることも明らかになった。

牛尾ほか(2016)では、地域看護診断の指導場面を想起し、教育的介入の状況と教員がとらえた学びの反応について、看護系大学の教員に対してインタビューを実施している。インタビューで得られた語りから、教員が学生に期待したパフォーマンスを解釈・記述し、地域看護診断の過程と4つの評価の観点と照合し、教員の評価視点を分析した。地域診断のパフォーマンス評価における教員の評価視点は、「重要な情報の抽出と解釈」「地域・生活の共感的理解」などの思考・判断、「情報収集のた

教育デザイン研究第14巻(2023年1月) 21

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

「コミュニケーション」などの技能・表現、「公衆衛生看護の知識・理解の深化」という知識・理解、「保健師の実践へのコミットメント」などの関心・意欲・態度から構成された。地域診断のパフォーマンス評価の規準となる内容の要素として、重要な情報の識別と関連づけ、地域・生活のイメージ・共感的理解、コミュニケーションおよび公衆衛生看護の専門職としての価値信念の内面化が見いだされた。

牧野 (2017) では、学生が実施する模擬授業において学生自身がルーブリックを作成し、それに基づいて評価する手法を導入する実践を試みている。教員を目指す学生にとって、授業実践力の修得は必須の課題である。そこで、学生が実施する模擬授業において学生自身がルーブリックを作成し、それに基づいて評価する手法を導入する実践である。その結果、学生の力量に応じた授業技術が訓練できるという効果が認められる一方で、着眼点が限定されるという課題がみられた。

西谷 (2017) では、ルーブリックを教育実践として活用し、学生の文章作成過程において「論理性」や「説得性」を意識させている。ルーブリックによって教員の評価指標を提示することで、評価の観点を学生に事前に理解させることができる。また学生が成果と評価結果とを対置し、自身の能力および到達度を鑑みることで自己評価や自己調整を促すことが可能となる。ルーブリックの教育実践の課題は、学生自身の意見や主張について省察させたり、支持しようと再考させたりといった段階的な養成を企図することであり、学生による成果および習得の客観的な認識と学修への実感を配慮することの重要性が示唆された。

小田ほか (2017) では、臨床能力を評価するためのルーブリックを開発して、学生の臨床能力を客観性のある到達レベルとして把握するとともに、日々の臨床実習での学習活動を記載するポートフォリオと組み合わせて運用することにより、臨床実習で行っている教育そのものを経時的に記録・評価し、実体化するという発想に基づく。このような背景から電子ポートフォリオの開発と運用を開始したが、学生・教員の受け入れはスムーズであった。臨床実習が進むにつれ、ポートフォリオに記載された教員による学生の評価は向上しており、経験を積むことによる学生の臨床能力向上が反映されたものと推察された。以上のことから、臨床実習における電子ポ

ートフォリオの導入は、学生自身の振り返りや教員の学生指導にとって有用であると考えられた。

小茂田ほか (2019) では、薬剤師の専門性を確立する導入教育体制作りを寄与すべく、アカデミック・ディテリング教育プログラムを開発した。教育プログラムは、4 年前期選択授業「アカデミック・ディテリング基礎演習」として、基礎薬学と臨床薬学の教員が協働して授業を行い、教育のねらいとして、「化学、薬理、薬物動態、ゲノムなどの薬学的視点から、医薬品の使い分けポイントをわかりやすく発表ができる」とした。ルーブリック評価の評価視点は「アカデミック・ディテリングの理解」、「病態の理解と薬理学的視点での医薬品選択」、「薬物動態の観点からの医薬品選択」、「化学構造式の観点からの臨床活用」とした。学生からは、薬理学、化学、薬物動態学等これまでに習った知識がどのように患者に活かすかが分かったという意見がある一方で、ディスカッションと講義の時間のバランスに更なる検討が必要と考えられた。

粟谷 (2020) では、教育実習生の社会科授業構成力を向上させるルーブリックの探索をしている。他大学を参考に、1 授業をつくる前提、2 授業づくり、3 授業実践、4 授業観察・検討会・省察の 4 規準を設けたルーブリックを作成した。①ルーブリックでの評価によると、実習生の中等社会科授業構成力は、定型的熟達者の段階では規準によっては向上が見られた。②ルーブリックは、実習の開始時から実習生に理解されるものではなく、徐々に理解される規準もあった。③理解されない記述語がある規準は活用が進まず、その規準で見とる能力の向上を促さないという結論となった。

文献レビューの結果を整理すると、1) 対象が教員か学生 (もしくは双方)、2) 実施されている分野 (文系・理系)、3) 開発か実践 (もしくは双方) といった分類ができる。1) については、対象が教員の報告が 4 件、学生が 1 件、双方が 4 件であった。2) については、文系が 4 件、理系が 5 件であった。3) については、開発のみが 3 件 (文系 2、理系 1)、開発と実践の双方が 6 件 (文系 2、理系 4) であった。対象とした文献からは、文系・理系を問わず、教員を主体とした開発と実践を伴う研究が主流となっている側面があるといえよう。すなわち、報告されているルーブリックは対象・分野・開発・実践に偏りがみられなかった。なお、先行研究のレビュー結果につ

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

いては、「表1」、「表2」として以下にまとめた。

表1:先行研究レビュー I

報告年	タイトル	実践方法	知見
2008	講義科目でアクティブ・ラーニングを可能にする基本構造—社会福祉専門職教育関連科目における実践から	社会福祉関連講義科目の教授法の改善として、1 年次必修科目「老人福祉論」、「障害者福祉論」の 2 科目で、課題や試験の評価方法を明記した「ルーブリック」と、毎回の課題として講義ポイントを学生が記入する「ワークシート」を導入した授業デザインを実施した	(1) 学生の授業への取り組みが真剣になり、ノートの取り方が向上した、(2) 途中まではいい加減に参加していた学生も、小テストの結果やルーブリックの厳密性を認識するにつれて真剣な学習者に変化した、(3) 初年次で教員の要求水準を明確に示すことの重要性を明らかにした、という結果
2014	授業実践者のヒアリングデータに基づく PBL ルーブリックの開発：京都産業大学 PBL 科目を例として	実務経験者を多く取り入れた教員団の形成により、教育目標となる汎用的技能について独自の概念形成が行われてきている。このため既存の理論的枠組みを直接当てはめてルーブリックを開発した場合、これまで教員団が創り上げてきた独自の教育概念を十分に活かすことは難しい。授業実践者からヒアリングデータを取得しデータを質的に分析することを通じて、PBL 科目のルーブリックの開発を行った	授業実践者と分析者が協議して概念化したルーブリックを利用することで既存のルーブリックの流用と比較すると教員の違和感の軽減を図ることが可能となることが推察される
2014	大学学習法へのパフォーマンス評価導入における実践的課題	新潟大学歯学部では、初年次教育として大学学習法を実施している。この授業は講義・演習での知識や技能をもとに、レポート作成とプレゼンテーションを行うもので、その学習活動を通して、問題解決能力、論理的思考力、表現力の開発をねらいとしている。今回、学習成果の直接評価に向けて、パフォーマンス評価を導入すべく、レポートからこれら能力を読み解くルーブリックづくりに取り組んだ。学習成果の直接評価に向けて、パフォーマンス評価を導入すべく、レポートからこれら能力を読み解くルーブリックづくりに取り組んだ。また、この経験からみえてきたパフォーマンス評価の難点とその対処について検討した	パフォーマンス評価により能力を把握できる可能性が示されたが、導入には教員の理解と協力、能力と関連した適切な評価観点の設定、評価の信頼性を高める工夫、評価と指導の一体化を考慮した授業デザインなど、いくつかの課題があることも明らかになった
2016	地域福祉の実習・演習における教員の評価視点—ルーブリック開発のためのパフォーマンス評価の規準となる内容の探索—	看護系大学の教員が地域福祉に取り組む学生のどのような反応をとらえ、どのように評価しているのかを調べることにより、地域福祉のパフォーマンス評価の規準となる内容を探索する	地域福祉のパフォーマンス評価における教員の評価視点は、「重要な情報の抽出と解釈」「地域・生活の共感的理解」などの思考・判断、「情報収集のためのコミュニケーション」などの技能・表現、「公衆衛生看護の知識・理解の深化」という知識・理解、「保健師の実践へのコミットメント」などの関心・意欲・態度から構成された
2017	ルーブリック評価を導入した授業改善の試み：模擬授業を評価するルーブリックを学生自身が作成する実践	教員を目指す学生にとって、授業実践力の修得は必須の課題である。学生が実施する模擬授業において学生自身がルーブリックを作成し、それに基づいて評価する手法を導入する実践	学生の力量に応じた授業技術が訓練できるという効果が認められる一方で、着眼点が限定されるという課題が浮き上がった

出所:検索結果を基に筆者作成

表2:先行研究レビュー II

報告年	タイトル	実践方法	知見
2017	文章力養成のためのルーブリック活用の教育的意義の検討：授業実践から見る教育手法	レポート・論文の評価において、学生に論理性・説得性を意識させるルーブリックを用いた	学生自身が自己評価や自己調整を促すことが可能となった
2017	診療参加型歯科臨床実習におけるweb公開型電子ポートフォリオの開発と運用	歯学部・歯科大学における臨床能力を評価するためのルーブリックを定め、学生の臨床能力を客観性のある到達レベルとして把握するとともに、日々の臨床実習での学習活動を記載するポートフォリオと組み合わせて運用することにより、臨床実習で行っている教育そのものを経時的に記録・評価し、実体化した	臨床実習が進むにつれ、ポートフォリオに記載された教員による学生の評価は向上しており、経験を積むことによる学生の臨床能力向上が反映されたものと推察され、臨床実習における電子ポートフォリオの導入は、学生自身の振り返りや教員の学生指導にとって有用である
2019	本邦初アカデミック・ディテリング教育プログラム開発～基礎を臨床につなぐPBLチュートリアル～	公正中立な基礎を臨床につなぐ科学的視点に焦点を当て、医薬品比較情報を能動的に発信する新たな医薬品情報提供アプローチと位置づけ、アカデミック・ディテラーの使命は医師の処方に影響を与え、処方を最適化することにあるとした。薬剤師の専門性を確立する導入教育体制作り)に寄与すべく、アカデミック・ディテリング教育プログラムを開発した	学生からは、薬理学、化学、薬物動態学等これまでに習った知識がどのように患者に活かすかが分かったという意見がある一方で、ディスカッションと講義の時間のバランスに更なる検討が必要と考えられた
2020	教育実習生のためのルーブリック開発に向けた探索的研究:中等社会科授業構成員力の向上を目指して	教員養成の質の保証と評価の公平性・妥当性が問題とされている。教育実習生の社会科授業構成員力を向上させるにはどのようなルーブリックがよいのかを探索するものである。他大学のものを参考に、1:授業をつくる前提、2:授業づくり、3:授業実践、4:授業観察・検討会・省察の4規準を設けたルーブリックを作成した	①ルーブリックでの評価によると、実習生の中等社会科授業構成員力は、定型的熟達者の段階では規準によっては向上が見られた。②ルーブリックは、実習の開始時から実習生に理解されるものではなく、徐々に理解される規準もあった。③理解されない記述語がある規準は活用が進まず、その規準で見ると能力の向上を促さない、という結論となった。実習生に実習開始時から理解され、活用されるものにするためには、ルーブリックを実習生と共に作成し、共に肯定的に活用して目標達成を目指すという、作成と活用の仕方が示唆された

出所:検索結果を基に筆者作成

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

(2) テキストマイニングの結果 (2019年, 理系対象)

1) 「単語出現頻度」(名詞)

スコアとしては「アカデミック・ディテール」¹⁾が最も高かった(475.58)。これは、「医薬品」(248.68)、「薬物動態」(160.32)を大幅に上回っていた。「出現頻度」としても、「アカデミック・ディテール」(37)や「医薬品」(40)が上位となっていた。上位10件の名詞を概観すると、「教育」、「選択」、「処方」、「視点」、「薬剤師」、「説明」、「違い」という専門分野(薬学)を中心とした単語が並んだ。患者と対峙する時、「選択」、「説明」、「違い」は特に重要なキーワードである(図1)。

たとえば、近年、先発・後発の医薬品があり(後発薬が主流となりつつある)、必要に応じて、それらの違いを説明して、選択可能であれば、患者に選択をさせるなどの場面も想定されることから、より実践的なルーブリックの開発が求められている証左といえよう。

2) 「共起キーワード」

キーワードで繋がった「ネットワーク」としては、大小含めて、計「7個」出現している。注目すべきは、大きなネットワークである。最も大きなネットワーク(ネットワークA)では薬学、薬剤師に関する事象が連結されている。すなわち、薬学部では「医薬品」や「薬物動態」について学び、大学の在学期間だけではなく、卒業後を見据えた広い見地からの教育が実践されており、ルーブリックについても「処方の最適化」に向けた、より実践的な指標となっていることが推察される(図2)。

名詞	スコア	出現頻度
医薬品	248.68	40
アカデミック・ディテール	475.58	37
教育	21.73	18
選択	12.42	18
処方	29.52	17
視点	20.99	17
薬剤師	43.63	15
説明	5.40	15
違い	4.73	15
薬物動態	160.32	14
薬学	77.72	14
患者	16.00	14
知識	7.30	14
授業	4.30	14
病態	85.86	13

図1:単語出現頻度(名詞)

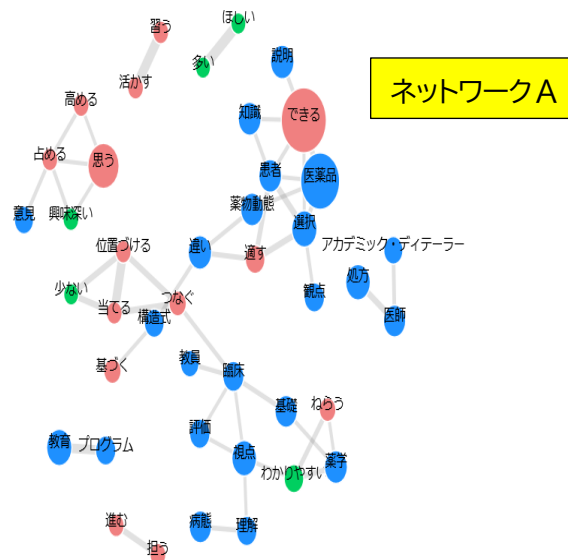


図2:共起キーワード

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー

(3) テキストマイニングの結果 (2020年, 文系対象)

1) 「単語出現頻度」(名詞)

スコアとしては、「ルーブリック」が最も高かった(1428.78)。これは、「規準」(1083.65)、「実習生」(475.65)などを大幅に上回っていた。「出現頻度」としては、「ルーブリック」、「授業」、「規準」が上位となっており、これらの単語はそれぞれ、スコアも 150、100、95 と高かった。上位 10 件の名詞を概観すると、「評価」、「実習生」、「活用」、「実習」、「指導」、「社会科」、「向上」という教育実習に関連する単語が並ぶ。ルーブリックに依拠した教育実習を展開するにあたり、「規準」の明確化や、教科ごとの実習、指導が重要であることの示唆であろう(図3)。

2) 「共起キーワード」

キーワードで繋がった「ネットワーク」としては、大小含めて、計「10個」出現している。ここでも注目すべきは、大きなネットワークである。最も大きなネットワーク(ネットワーク B)では授業やルーブリックを中心に関連事項が連結されている。授業を中心とした事項としては、「生徒」、「実践」、「目標」などであり、ルーブリックを中心とした関連事項としては、「実習生」、「活用」、「評価」などとなっている。教育実習生(社会科)の授業構成力向上がねらいとされており、特定の分野を掘り下げるといより、ルーブリックの関連概念など基礎的事項を認識させる意図がみられた(図4)。

名詞	スコア	出現頻度
授業	273.59	150
ルーブリック	1428.78	100
規準	1083.65	95
評価	130.18	76
氏	76.92	76
実習生	475.65	65
活用	159.91	59
実習	153.22	57
指導	143.36	56
社会科	354.22	48
向上	156.69	47
目標	52.10	46
生徒	86.90	42
相田	256.21	39
飯田	147.21	35

図3:単語出現頻度(名詞)

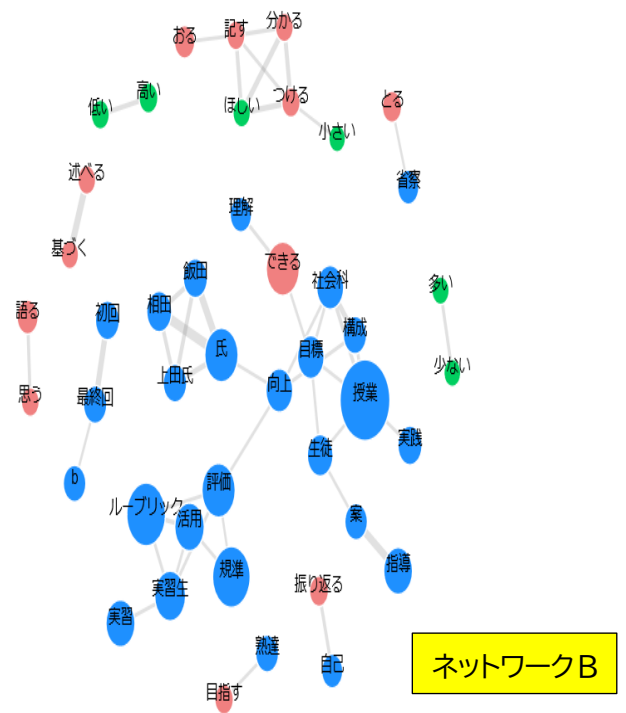


図4:共起キーワード

4. 考察と結語

本研究における調査により、明らかとなったルーブリック開発、実践についての実態に関する知見は、結果をふまえて整理すると以下の通りである。

1) 文献レビュー結果の分類としては、1) 対象が教員が学生（もしくは双方）、2) 実施されている分野が文系・理系か、3) 報告の中心が開発か実践（もしくは双方）という視点から研究されている。

1) については、対象が教員の報告が4件、学生が1件、双方が4件であった。2) については、文系が4件、理系が5件であった。3) については、開発のみが3件、開発と実践の双方が6件であった。対象とした文献からは、文系・理系を問わず、教員を主体とした開発と実践を伴う研究が主流となっている側面がある。また、理系と比較すると、文系は開発よりも実践に重きをおくスタンスである。すなわち、文系の場合、オリジナルのルーブリック開発の必要性が必ずしも高くはなく、既存のルーブリックに依拠した利活用が主流である。開発のみの文献もみられたが、有用なルーブリックとするには、教員が一方向的にルーブリックを開発するだけではなく、実践を伴う必要がある。理系・文系問わず積極的に開発と実践を結節させた研究が望まれる。

2) テキストマイニングにおいては、理系と文系それぞれの文献を1つずつとりあげた。

単語出現頻度においては、スコアと出現頻度は相関関係にあるといえるが、理系、文系ともに、それらに相関関係があった。理系文献(2019)においては、「医薬品」、「アカデミック・ディテリング」、「薬物動態」など専門的用語のスコアが高かった。他方、文系文献(2020)においては、「ルーブリック」、「規準」、「実習生」など、専門的用語というより、汎用的な教育用語のスコアが高かった。これについては例として挙げたルーブリック(図5)においても示されている。

共起キーワードにおいては、理系文献(2019)、文系文献(2020)ともに大小、多くのネットワークが形成された。理系文献(2019)においては計7個のネットワークが形成されており、最大のネットワークAにおいては「医薬品」、「薬物動態」を中心とした細分化された学生が修得すべき事項が連結されているが、注目すべきは別に配置されている「医師」、「アカデミック・ディテラー」、「処方」で形成された小さなネットワー

クである。これらも薬剤師としてきわめて重要な要素である。卒業後を意識したカリキュラムとそれに付随するルーブリックが開発されていることの示唆があるといえよう。他方、文系文献(2020)においては計10個のネットワークが形成されており、最大のネットワークにおいて、「ルーブリック」、「授業」、「規準」など論文の中核事項がほぼ網羅されていた。すなわち、ルーブリックと授業を各々中心とした「樹形」が合わさって1つのネットワークを形成しており(ネットワークB)、あくまでも大学授業の一環としてルーブリックが開発されていることの示唆が得られた。これは、最大のネットワークの他に重要事項に関連したネットワークがある理系とは異なる。

理系と文系では、研究内容や手法、進路など多くの違いがあるが、ルーブリックにおいても違いがあることが明らかとなった。理系においては、日常から実験などを通じてルーブリック開発、実践につながる要素が多いが、文系の場合は必ずしもそうではない。ルーブリックが日本に導入されて未だ歴史が浅いといえるが、教員だけでなく学生を積極的にルーブリック開発に関与させ、開発と実践を積み重ねていくことで、教員、学生双方にとって有用なルーブリックが形成されていくのではないだろうか。本研究では、2008年以降の国内文献に着目したが、海外文献と比較することで、新たな知見が得られる可能性がある。そして、国公立・私立、学部・大学院などの差異に着目することで異なる結論が導出される可能性もあるが、今後の研究課題としたい。本研究により、ルーブリックに関する議論の拡張とともに、一定の示唆を提供するものと期待される。

【授業別ルーブリック】

評価項目	評価基準				
	期待している以上である	十分に満足できる(履修目標)	やや努力を要する	努力を要する(到達目標)	相当の努力を要する
社会調査法の理解度	授業内容を越えた自主的な学修が認められる。	授業内容をほぼ100%理解している。	到達目標は理解しているが、授業内容に不足がある。	到達目標に達していることが認められる。	到達目標に達していない。
社会調査法における課題解決能力	解法が分からない他人にアドバイスをできる。	何も参照せずに独自の能力で課題を解くことができる。	参考書などを参考にすれば、独自で課題を解くことができる。	他人のアドバイスがあれば課題を解くことができる。	他人のアドバイスがあっても自発的に課題を解くことができない。
調査能力(予習)	自ら進んで予習範囲を越えて調べている。	予習範囲を十分に理解し、他人に説明できる。	指示した予習範囲の理解にあいまいな点がある。	指示された範囲は予習するが、理解が不十分である。	指示された範囲は予習が不十分である。

図5:ルーブリックの例(文系学部)

出所:横兵国立大学シラバス

大学におけるルーブリック開発に関する文献レビュー注

¹⁾ 患者の安全確保と費用対効果を考慮した医療を推進するための薬剤師の役割として、アカデミック・ディテールリングは、医療者や患者、特に医師に対する双方向的な情報提供の新たなアプローチであり、アカデミック・ディテラーとして訓練を受けた臨床薬剤師がエビデンスに基づいた医薬品の公正中立な適正使用情報をわかりやすく提供する活動である（東京理科大学研究推進機構総合研究院）。

【謝辞】

本研究は、法政大学大原社会問題研究所、武蔵大学総合研究所、日本大学歯学部付属歯科病院の関係者の方々との関連が起点となっている。ここに記して感謝申し上げます。

【文献】

- ・粟谷好子（2020）「教育実習生のためのルーブリック開発に向けた探索的研究:中等社会科授業構成力の向上を目指して」『日本教科教育学会誌』43(2)、pp.63-75.
- ・牛尾裕子・松下光子・塩見美抄・宮芝智子・飯野理恵・嶋澤順子・小巻京子・竹村和子（2016）「地域診断の実習・演習における教員の評価視点:ルーブリック開発のためのパフォーマンス評価の規準となる内容の探索」『日本地域看護学会誌』19(3)、pp.6-14.
- ・小田陽平・小野和宏・藤井規孝・小林正治・前田健康（2017）「診療参加型歯科臨床実習におけるweb公開型電子ポートフォリオの開発と運用」『日本歯科医学教育学会雑誌』33(2)、pp.65-73.
- ・小野和宏・西山秀昌・八木稔・ステガロユ ロクサーナ・重谷佳見・山村健介・井上誠・前田健康（2014）「大学学習法へのパフォーマンス評価導入における実践的課題」『新潟大学高等教育研究』1(2)、pp.5-8.
- ・笠原千絵・山本秀樹・加藤善子（2008）「講義科目でアクティブ・ラーニングを可能にする基本構造--社会福祉専門職教育関連科目における実践から」『研究紀要』(9)、pp.13-23.
- ・小茂田昌代・和田猛・高橋秀依・嶋田修治・真野泰成・鈴木立紀・高澤涼子・尾関理恵・青山隆夫（2019）「本邦初アカデミック・ディテール

リング教育プログラム開発~基礎を臨床につなぐPBLチュートリアル~」『アプライド・セラピューティクス』11、pp.46-51.

- ・西谷尚徳（2017）「文章力養成のためのルーブリック活用の教育的意義の検討：授業実践から見る教育手法」『京都大学高等教育研究』（23）、pp.25-35.
- ・福田洋子・野呂健一・寶來敬章・鷺尾敦（2018）「介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題-実習施設へのアンケート調査から-」『キャリア研究センター紀要・年報』(4)、pp.35-46.
- ・星裕・越川茂樹（2020）「大学教育においてルーブリックを自己評価に活用した影響と課題」『教師学研究』23(1)、pp.21-31.
- ・牧野治敏（2017）「ルーブリック評価を導入した授業改善の試み：模擬授業を評価するルーブリックを学生自身が作成する実践」『大分大学高等教育開発センター紀要』(9)、pp.77-84.
- ・松尾智晶・中沢正江（2014）「授業実践者のヒアリングデータに基づくPBLルーブリックの開発：京都産業大学PBL科目を例として」『高等教育フォーラム』（4）、pp.37-44.

【WEB サイト】

- ・東京理科大学研究推進機構総合研究院
アカデミック・ディテールリング・データベース部門
https://academicdd.ps.noda.tus.ac.jp/addsweb/wp/whats_academic_detailing/（2022/7/25 閲覧）.
- ・文部科学省、2014年大学教育部会 第25回資料
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1340057.html（2022/8/11 閲覧）.
- ・文部科学省、大学における教育内容等の改革状況について（平成30年度）
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm（2022/8/26 閲覧）.
- ・ユーザーローカル
<https://textmining.userlocal.jp/>（2022/7/23 閲覧）.
- ・横浜国立大学シラバス
https://risyu.jmk.ynu.ac.jp/gakumu_portal/public/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2021&lct_cd=802101Z&je_cd=1（2022/2/5 閲覧）.